

読書通信

第15号

発行人: amagata

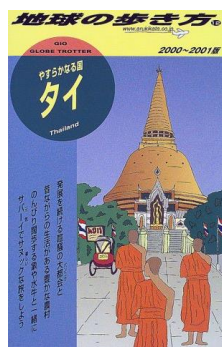
自由旅行のすすめ

インターネットの発達によって、現代の社会ではあらゆる情報を入手できるようになった。実際旅行しなくても、文章・写真・動画によって世界各地に行ったような気分になれる。場合によっては、行くよりもより詳細な情報を知ることができ。けれども、実際にその場所を訪れてみると、実際に見てみると、現地の人と接してみないと、わからないこと・感ぜられないことも多々ある。

インターネットのおかげで、ホテルの予約、飛行機のチケットの購入は安いものが容易に手に入るようになった。現在はコロナ禍、思うように旅行はできないけれど、機会が訪れば、是非「本物」を味わう旅に出発して欲しい。私自身も多くの国を訪れ、その場その場で様々な本物を味わった。押しつけの駆け足の旅行ではなく、自由きままな旅に浸って、様々な経験をしたい。自由旅行のバイブルと言える作品を紹介しよう。

▽「地球の歩き方」

インターネットがまだ存在しない頃、旅行先の情報はこの本に頼らざるを得なかった。「地球の迷い方」と揶揄されることもあったが、この本を握りしめて旅行したものだ。現在は高級ホテルやレストランなど中高年向けの掲載に変わってしまったが、かつてはバックパッカー向けの安宿や食堂が中心に掲載されていた。



▽沢木耕太郎「深夜特急」

香港とバンコクを経由し、インドのデリーから、イギリスのロンドンまでを、乗合バスだけを使って一人旅をするという目的で日本を飛び出した「私」。様々な人々と事件に出会いながら目的を達成する。筆者自身の旅行体験に基づいた物語。

この本はバックパッカーのバイブル的存在となり、80年代・90年代の個人自由旅行流行の一翼を担った。現在もこの本のファンは多く、その存在価値は薄れていない。



▽下川裕治「12万円で世界を歩く」

1988年から89年にかけて、週刊朝日に連載された「十二万円の旅」シリーズ。一体十二万円で世界のどこまで旅できるのか。アジア・ヨーロッパ・アメリカ・メキシコ・北極圏まで。明細書が載っているの、貧乏旅行の参考になる。金が乏しいゆえに、現地の人々の世話になり、現地の人々が乗るバスに揺られ、現地の人々が入る食堂で頼める。だからこそ、その国の人々の素顔や本当の暮らしがみえてくる。「経費を切りつめることが旅の目的ではない。だが、金をかけない旅でなければ見えないものもある。」

「最近読んだお薦めの本」

「杏子・妻隠」



古井由吉

1971年芥川賞受賞作品

杏子は高さの異なったハイヒールを履いて、常にゆらゆらとバランスを崩しているような危なっかしい女性。杏子は山の重みが釣り合いを取る場所に偶然腰をおろしてしまい、身動きがとれなくなってしまう。そこから救い出してくれた彼。少し変わった二人の交際を描いた作品。

人間はたった一人の絶対的な存在ではなく、周りの人間及びすべてのもののなかで、いざばんバランス（釣り合い）のよいところに存在している。けれども、周りのものは不変ではなく、常に変化するので、自分も変化しなければ、居心地が悪くなってしまう。釣り合いのとれる瞬間は短く、いつも違和感を抱きがちで、居心地が悪い状態ばかりで生きていかなければならない。私たちも杏子と同様。いつもふらふらと綱渡りをしてい

るようなものだ。後戻りできない。霞んでよく見えない限られた綱先に向かって行くだけだ。ときには綱に腰掛けて休憩したいけれど、後から後から人々が迫って来るような焦りを覚え、立ち止まることもできない。

後記

私の最近の旅行スタイルは、滞在型です。2年前はパリのアパートに8泊し、美術館巡りなど、生活するように過ごしました。かつてはバンコクIN、ラオス・中国雲南省經由、香港OUT、各地でメコン河を見る移動型の旅行もしました。いままで一番安い一泊の料金はこのときのラオスでの250円です。いままで一番美しい天の川を見たのもこのときのラオスです。

文学を語り合っていた方が急逝されました。語り合うことで刺激を受け、まだ読んでいない本に挑戦していたのに。そんな一冊「杏子」の感想を伝えたかったのに。いまだに信じられません。直接会うことはできないけれど、私の心の中に生き続けています。心から「冥福をお祈り申し上げます。」



「読書通信」バックナンバー